

令和4年度 北海道小学校長会地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報告地区：石狩地区
- 2 事例報告学校名：北広島市立双葉小学校
- 3 報告者職・氏名：校長 若林 公一
- 4 キーワード：特色ある学校経営 「小中一貫教育」の取組

1 はじめに

本校は平成24年4月に北広島市立広葉小学校と北広島市立若葉小学校が統合し、今年、開校11年目を迎える。児童は明るく素直で優しい子どもが多い。保護者の教育的関心が高く、児童の学力も高いが、積極性や粘り強さ、何事にもチャレンジしようとする姿勢についてはやや弱さがあり、今後の取り組むべき課題と考えている。

北広島市では平成30年度より、市内一斉に小中一貫教育が導入された。義務教育9年間を通して、「大志をいだき 心豊かに たくましく 生きる子ども」を育成することをねらいとしている。本校は徒歩7分の距離にある北広島市立広葉中学校と1小1中の施設分離型による小中一貫教育を推進しており、児童生徒の行き来が徒歩で可能な恵まれた環境にある。昨年は、「小中一貫教育全国サミットin北広島」が当市で開催され、本校もこれまでの実践を発表し、全国の教育関係者の方から多くのご示唆や貴重なご意見をいただいたところである。

ここでは、特色ある学校経営として、本市で取り組んでいる小中一貫教育を基盤とした経営マネジメントについて簡単に紹介していく。

2 小中一貫教育を基盤とした学校経営

【課題】

導入当初は目的が職員間で共有されず、新たな業務の増加という不安から懐疑的な見方をする教員が少数ながら見られた。また、一貫教育の進め方について見通しがもてず、危機感を募らす教員もいた。導入後も小中独自文化の違いから、意見が対立することもあった。

(1) 教職員の共通理解を図る

小中一貫教育について、市内一斉導入に向け、市内の全教職員向けに研修会が開催され、教職員は小中一貫教育導入の経緯及び趣旨、想定される取組等を大まかに把握することができ、先の見えない不安感を解消することができた。並行して、校内では職員研修を進めるとともに、毎年、人事異動で職員の入れ替わりがあるため、年度初めに校長（又は教頭）が職員会議等で自校の教職員に導入の経緯・趣旨を説明することを継続している。

(2) 目指す子ども像の設定

計画的に会議を開催し、現状を分析した上で、9年間を通して本中学校区の子どもたちに身に付けさせたい力について議論し、以下の重点目標とスタンダード（小中共通で育成したい資質・能力）を掲げた。

【重点目標】「共に学び、共に高め合う子どもの育成」

【スタンダード】「表現・えがお・チャレンジ」



(3) グランドデザインの作成と共有

両校の校長、教頭による管理職会議を2か月に1回程度で開催し、小中一貫教育推進の方向性やPTA活動、児童生徒の学力及び体力の状況、教職員や保護者の情報について交流を図り、情報共有を図った。また、小中が各々作成していたグランドデザインについても、一貫性のある内容に改定し、教職員間での共有及び地域・保護者への啓発に活用した。

(4) 運営及び組織体制の整備

小中一貫教育の導入当初は管理職が中心に推進していたが、現在は、校務分掌に担当を位置付け、計画的に取組を進めている。校長は進捗状況を見守りつつ、必要に応じ適宜、指導助言及び担当教員の相談に乗っている。組織体制は反省を踏まえながら見直しを図り、令和2年度からは「小中一貫教育推進委員会」と3つの「推進部会」、11の「教科部会」を設定し活動している。

(5) 具体的な取組事例

小中学生が合同で体育科「器械運動」や理科「筋肉の働き」、社会科「防災教育」に取り組む等、様々な教科で実践を積み重ねてきた。中学生は小学生に教える活動により、自分自身もより理解を深めるとともに自己有用感を高め、小学生は中学生へのあこがれと学習に対する意欲向上につながった。

また、専門性の高い中学校教員が音楽科や外国語において小学校への乗り入れ授業を行うことにより、中学校とのつながりを意識した授業実践に取り組むことができた。さらに、合同シャトルランの実施や合同ごみ拾い・挨拶運動、オンラインを活用した授業交流や生徒会と児童会の交流などを行っている。



(6) 成果と課題

○中1ギャップが減り、中学校へのスムーズな入学につながっている。

○小中の教員同士のコミュニケーションが活発になり、児童生徒や保護者等の情報共有や連携が密になり、生徒指導がスムーズに行われるようになった。

○学力に関わる各種調査の結果分析を交流することにより、小中の教員が広葉中校区の児童生徒の実態に応じた教育課程の編成に取り組むことができ、確かな学力の育成につながっている。

●異動による教員の入れ替わりがあっても持続可能な小中一貫教育の推進に努める必要がある。

3 今後に向けて

中学校の専門的な知識や技能をもった教員に指導してもらうことは小学生の子どもたちにとって大変貴重な機会である。また、小学生が実際に中学校に足を運び、校舎内の雰囲気を感じながら、中学生と一緒に学ぶこと、中学生から教わることも同様である。今後も単なるイベントで終わることなく、教育課程に基づき、小中の教員がその授業や活動を通して、どのような資質・能力を児童生徒に育成するかを意識しながら実践を積み重ねていきたい。

最後に、小中一貫教育を推進することがゴールではなく、あくまでも、北広島市が掲げる義務教育9年間を通して、「大志をいだき 心豊かに たくましく 生きる子ども」を育成するための一つのツール、手段に過ぎないということを肝に銘じ、今後も学校経営に邁進する所存である。

